# 出来事ファイル (№22－6)

## ■水曜市 ひさしぶり

元町1番街商店街では4月20日、11時～19時まで、2年3か月ぶりとなる水曜市を開いた。コロナ禍が未だ治まらない中、前宣伝も自粛して出店者も地元野菜のほかお茶、卵など9店舗にしぼっての開催。特色のある日常商品販売の再開に、常連客のほか、商店街を訪れたひとたちも立ち寄って、休日の商店街を賑わせた。

## ■近藤裕重さん　黄綬褒章受章

兵庫県繊維品小売商業組合の常任理事として業界全体の底上げに尽力してきた近藤さんは、令和4年春の褒章で、黄綬褒章を受章されました。おめでとうございます。

## ■元町ミュージックウイーク　開催きまる

1998年から毎年ストリートコンサートをはじめ、周辺ホールでのコンサートで元町の秋を音楽で彩ってきた「元町ミュージックウイーク」。コロナウイルスのため2年間、休みとなったが、10月1日(土)から9日(日)まで、元町商店街周辺地域を舞台に開催されることになった。コロナ感染対策の必要から、例年通りの公演ができず、出演者の一般募集は行わない。開催内容は、9月に入ってから公開予定。

## □読者プレゼント

下記展覧会鑑賞ご希望の方は、ハガキに展覧会名・住所・氏名・年齢明記の上、編集部まで。「明石の木造船」は5名の方に、その他の展覧会は2名の方に、先着順でペア招待券をお送りします。

### ◎企画展「明石の木造船」

明治時代に中部幾次郎(大洋漁業(現マルハニチロ)創業者)により改良された活魚運搬船「明石型生船」の関連資料をはじめ、古墳時代の丸木船から昭和40年代まで造られていた漁船に至るまでその部材や模型、写真などから、明石の木造船の歴史をたどります。

会場:明石市立文化博物館
(℡078－918－5400)
会期:6月2日(木)～6月26日(日)月曜休

角田進『出買船模型』

### ◎連載完結記念　ゴールデンカムイ展 ＜京都会場＞

明治末期の北海道・樺太を舞台に、漫画家・野田サトル氏が描く大人気漫画『ゴールデンカムイ』。冒険・歴史・文化・グルメ・狩猟といった本作品の魅力を凝縮した大規模展覧会です。

会場:京都文化博物館(℡075－222－0888)
会期:7月9日(土)～9月11日(日)
©野田サトル／集英社

### ◎貞享本當麻曼荼羅修理完成紀念　特別展

中将姫と當麻曼荼羅―祈りが紡ぐ物語

本展では、修理を終えた貞享本當麻曼荼羅(重要文化財、當麻寺蔵)の美しい姿をご覧いただき、修理過程で確認された資料を紹介しながら貞享本製作プロジェクトの全貌をお示しします。

会場:奈良国立博物館 西新館
(℡050－5542－8600)
会期:7月16日(土)～8月28日(日)

中将姫坐像(厨子入)
江戸時代 延宝9年(1681)
京都・大雲院【通期】

## 神戸元町商店街 楽市楽座情報 6月

### ◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料)　℡361－4523

6月 2日(木)～6月 7日(火)
第40回光彩会(展示は6月3日から)
6月 9日(木)～6月14日(火)
第10回橋水会水彩風景画展
6月16日(木)～6月21日(火)
第21回風の会水彩画展(展示は6月17日から)
6月23日(木)～6月28日(火)丹下幸雄追悼展
6月30日(木)～7月 5日(火)
第24回ひまわりグループ展

### ◇元町映画館(有料)　℡366－2636

5月28日(土)～6月 3日(金)
特集「森田芳光70祭 in 元町映画館」
『20世紀ノスタルジア』
5月28日(土)～6月10日(金)『牛久』
5月29日(日)～5月31日(火)
『自宅警備員と家事妖精』
6月 1日(水)～6月17日(金)『ドンバス』
6月 4日(土)～6月10日(金)
『MADE IN YAMATO』
6月 4日(土)～6月17日(金)
『森のムラプリ インドシナ最後の狩猟民』
『ロスバンド』
6月11日(土)～6月24日(金)
『メイド・イン・バングラデシュ』
6月18日(土)～6月24日(金)
劇場版『おうちでキャノンボール』
6月25日(土)～7月 1日(金)
『水俣曼陀羅』・『永遠が通り過ぎていく』
【予定は変更になる場合がございます。】

### 栄町通クリーン作戦

栄町通クリーン作戦は雨天の為中止となりました。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。

### 定例イベント再開へ

### ■芸術家たち展2022

元町商店街が主宰する「元町の芸術家たち展2022」が4月28日～5月3日まで、まちづくり会館の地下ホールで開催された。新型コロナウイルスの影響で2年間、開催できなかったが今年、開催にこぎつけた。絵画や書など、元町界隈を拠点に活動する芸術家たち26名の常連作家が出展、久しぶりの展示で多くの人が地元作家の作品を楽しんだ。

元町の芸術家たち展

### 編集後記

本紙編集部では、月刊タウンニュースのほか冊子も作成してきた。まとめて記録しておこう。2002(平成14)年6月、震災後、個性的な乙仲通界隈を若者のファッション発信地と位置づけ、コンテストを主宰した(財)阪神・淡路産業復興推進機構の要請でまとめた「乙仲通(栄町・海岸通)まちづくりフォーラム」を皮切りに、2004(平成16)年5月には元町商店街主催の130年記念行事の記録誌を作成した。2014(平成26)年12月「元町商店街の歩みをまとめて」、との声を受けて明治7年5月にはじまる140年の歩みを「神戸の良さが元町に」としてまとめたほか、タウン協議会創立30年の日を迎えた2021(令和3)年8月には、その歩みを「神戸はじまりの街のまちづくり」と題して冊子にしている。



みなと元町 TOWN NEWS タウンニュース

発　行:みなと元町タウン協議会　住　所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内　発行人:奈良山喬一　編集人:岩田照彦　電話・FAX:078－391－0831

# 良質な都市景観とまちの賑わいの最良バランスを求めて

合資会社ゼンクリエイト 根津昌彦

2022年3月より、元町商店街連合会では「元町商店街内に掲出可能な自発光式広告物基準」を施行された。これは、2021年6月に改訂した元町商店街まちなみ内規ルールの中で、兼ねてより示してきた《地上広告物・看板》に関して、「原則設置しない。やむを得ず設置する場合は、まちなみ委員会の承認を受けたうえで、次の事項を厳守」として掲げていた5つの項目の内、「自発光式は自粛、点滅式は禁止」というルールについて、より具体的な基準を示したものである。

具体基準制定の目的は、通行者に対して不快感を与えず良好な商店街景観をつくっていくということに他ならない。自発光式の中でも、デジタルサイネージは、広告物自体が発光だけでなく文字や映像などが動くことにより訴求力を高めることを意図した媒体であり、まちの景観や通行人に与える影響が大きく、程度が過ぎると悪影響を及ぼしてしまう広告物である。

元町商店街でも、気がつけばデジタルサイネージを活用した自店商品・サービス等の広告が増えだしたため、まちなみ委員会で半年間議論を重ねて、この程以下に示した設置基準を定めた。

| | |
|---|---|
| 設置数 | 1店舗につき、数は1つまでとする |
| 大きさ | 画面の大きさはヒューマンスケール(約0.5㎡以下)とする |
| 音 | 音は出さない |
| 掲出の向き | 突出広告物のように通りの進行に対して正対してはならない |
| 光の色彩・輝度、動きなど | 歩行者等の安全や健康が確保されるように、派手な色彩、過度な発光や点滅、激しい動きは避ける |
| 動画の内容 | 動画の内容は、以下に示したものに当てはまるものを流してはならない<br>・自家用でないもの<br>・商品やサービスの価格などを誇張した表現のもの<br>・動画配信サイトなどで流している動画をそのまま流すもの<br>・公序良俗に反するもの、または公衆に不快感や不安を与えるもの<br>・商店街内の歩行の妨げとなる人だかりを生じさせるもの |

表　デジタルサイネージに関する具体的な設置基準

神戸市内で景観まちづくりに取り組んでいる団体はいくつもあるが、上記のように細部にわたったデジタルサイネージに関する具体基準を定めた地区は、おそらく元町商店街が初めてではないかと思う。今後設置を検討する店舗・事業者があれば、この基準をご理解いただき、早めにまちなみ委員会との協議を行っていただきたいと願っている。

さて、現在さまざまな場所で再整備にかかる工事が進められている三宮エリアに目を向けた時、最近気になっていることがある。今年の3月末には、JR三ノ宮新駅ビル開発計画の概要が発表され、先月には神戸阪急の全館改装計画が発表された。また、さんちか1～3番街のリニューアル工事の第1期がこのほど完了し、1、2番街は閉鎖、3番街がリニューアルオープンした。神戸の玄関口の1つである三宮の地下や地上が再整備されていくこと自体は大いに歓迎したいが、工事期間中の歩行者に向けた仮囲い利用・壁面利用サインには、いささか疑問を呈したい。

私は、三宮駅前景観形成連絡協議会の事務局支援という仕事もさせていただいているのだが、今般の神戸阪急の全面改装にあっては、同協議会が運用している屋外広告物ガイドラインに従って、仮囲いに掲出する広告物であっても、事業者は都度事前協議を申入れ、デザインについての地域要望に真摯に向き合ってくださり、協議会との間で良好な関係を築かれている。

ところが、知らぬ間に改装中の建物ガラス面全面に、神戸市内に本拠地を構えるプロサッカーチームの選手の巨大ポスターが掲出されたり、西宮市内に本拠地を構えるプロ野球チームの商用広告と思しき巨大ポスターが貼り出されている様子を見て、これを賑わいづくりというのだろうかという疑念が湧いてくるのである。

先日も、ある業者から巨大デジタルサイネージをビル壁面につけたいと事前相談の申入れがあり、お会いさせていただいた。設置・掲出者側は、まちの賑わいづくりに寄与し、まちを盛り上げていきたいということを言われたが、仮にすべてのビルに巨大デジタルサイネージが設置された姿を想像したとき、神戸市民は、あるいは神戸を訪れる人たちは、これこそが神戸の魅力と感じるだろうか。

少なくとも私が関わっている三宮や元町の景観形成に関わる協議会の皆さんは、物事には程度やバランスというものがあると考えている方ばかりであり、昔は声高に言わずとも秩序が保たれてきた街が、ルールがあってもお構いなしという街に成り下がってしまうことに対して、強い危機感を抱いておられる。

神戸のまちで繰り広げられてきたさまざまな営み、これから変わろうとするまちの将来像や新しくはじまる物語などを、工事中の人の出入りを失った建物ガラス面や仮囲いにさりげなく掲示してあげることで、何気なく歩いている人の目に留まり、神戸のまちへの理解を深めていただけるような場所にできるのではないだろうか。

どこに軸足を置いて考えるかによって答えが変わることもあろうが、良質な都市景観とまちの賑わいとのバランスこそ、私たちが常に意識しなければならない論点だと思う。

# 海という名の本屋が消えた（103）

平野義昌

## 光村弥兵衛・利藻（1）

光村弥兵衛（1827～91年）は「神戸幼稚園」開園（1888・明治20年）に寄付を申し出た神戸の海運業者。三菱・岩崎弥太郎と並び称された富豪である。その子息・利藻（としも）は美術印刷と写真・映画撮影の先駆者。父子共々波瀾万丈の人生を紹介する。

大正・昭和の人気小説家・劇作家の長谷川伸（1884～1963年）が「光村弥兵衛」の前半生を歴史随想に書いている。註1

弥兵衛は周防国光井村（山口県光市）の農民、本名・水本利吉。たびたび名前を変え、神戸に来たあと「光村弥兵衛」（姓は出身の村名から）を名乗る。本稿では以下「弥兵衛」で統一する。

幕末動乱の時代、弥兵衛は26歳で故郷を飛び出し諸国を巡る。江戸で足軽、医者の下僕、餅売りなど職業転々。長州毛利屋敷の賄い・掃除夫に雇われる。上役の許しを得て屋敷内で味噌、醤油、日用品を販売、自分の仕事は人を雇ってやらせた。「安政大地震」（1855・安政2年）に遭い、問屋への借金が60両できた。問屋は支払いを猶予し、新しい商品も回してくれた。逆の立場になれば小売り屋が問屋を助ける。保険制度以前の商道＝信用・救済・互助の精神が成立していた。

弥兵衛は毛利家修復の人夫を募り世話役になる。毛利家の人夫70～80人、他家の求人にも応じて一時は300人を差配した。小屋を建てて住まいのない人夫を合宿させ、古畳や竹材を集め壁用の土を手作りし、古釘を回収して役所に売るなど、「智機敏活、殆ど他人の及ぶ所に非ず」（註2）の奮闘ぶりだ。2年ほどで江戸復興が一段落する。房総に行くが仕事なし。開港していた下田に向かうが、横浜開港に伴い閉鎖が決定していた。弥兵衛は漁師の網元に雇われた。漁にも出るが、商いができるので番頭役になる。「桜田門外の変」（1860・万延元年）後のこと、弥兵衛は集金の帰途、不良浪人集団に拉致される。近在の村にも井伊大老首切り事件の風聞が流れていた。金持ちを恐喝するため猫の首の入った風呂敷を持たされた。弥兵衛は隙を見て逃げ出し、売り上げ金を無事持ち帰った。網元は彼の度胸と機転に驚く。

1861（万延2・文久元）年春、弥兵衛は横浜に出る。建築ラッシュゆえ、普請場の仕事に応募した。人夫頭が出した条件は歌が歌えること。歌える、と答えて採用された。

〈……さて彼の男は地均しの現場へさし向けられ、人夫として仕事に就いてみると、役は木遣りの音頭取りであった。ところがこの男は、地固めの胴付きにつかう労働唄など、まるで知らないのだから、忽ちのうちに進退谷（きわ）まって、逃げ失せてしまった。〉註1

次に弥兵衛が見つけた糊口の道は薩摩芋の行商。八百屋と交渉して後払いで担ぎ売りをはじめた。町を流していると、別の八百屋が外国船に物品を販売するための幕府運上所手続きに困っていた。簡単な願書なので弥兵衛が書いてやった。そのままその店の書記におさまる。役所や外国船の仕事を覚えながら英会話を独習。生糸商の株を借りて共同で生糸貿易をはじめるが、あまり利益がなかった。フランス軍艦が入港してくると、弥兵衛は言葉が通じないことをチャンスと見た。日本語堪能のフランス人宣教師ジラール（横浜天主堂創立者）に仲介を頼み、出入り商人になれた。フランス語も学習しただろう。弥兵衛は提督に信頼され、渡仏を誘われた。まだ海外に自由に行ける時代ではない。

63（文久3）年、長州藩士5名がイギリスに密航を企てた。弥兵衛は運上所から停泊中のイギリス船ベンアイラ号探索を命じられた。中国人コックに、日本人7～8名乗船、と教えてもらう。甲板の荷物には「池田信濃守」の札があった。幕府御目付である。運上所にもその通達があったため弥兵衛に確認するが、弥兵衛は詳細を語らず日本人乗船、とだけ報告した。結果、運上所はベンアイラ号だけをマークし、5人は別の船で横浜脱出に成功した。「長州ファイブ」、伊藤俊輔（博文）、志道聞多（井上馨）、山尾庸三、遠藤謹助、野村弥吉（井上勝）。長谷川は、弥兵衛は周防出身であるから長州藩士らの利益を図ったのだろう、と推測する。のち神戸で弥兵衛は伊藤、志道、山尾と関係ができる。補註1

戦争によって港の商売が不振になっていた。少し時計を戻す。1862（文久2）年8月、東海道生麦村（横浜市鶴見区）で乗馬のイギリス人4名と薩摩藩行列が行き合った。日本のルールでは大名行列に道を譲らなければならない。互いのことば・身振りが伝わらず、薩摩藩士が刀を抜き、イギリス人1名死亡、2名負傷の大事件になる。「生麦事件」である。イギリスは薩摩に関係者処分と賠償を要求するが、薩摩は拒否。翌63年7月、イギリス軍艦が薩摩を攻撃し、「薩英戦争」。薩摩は市街地に大きな被害を受け、賠償金を支払う。同年5月には長州藩が下関海峡を通るアメリカ・フランス・オランダ船に砲撃を開始。64（元治元）年8月イギリスを加えた連合軍が下関を攻撃。「馬関戦争」である。攘夷二大藩長州・薩摩が海外軍事力に圧倒された。

その状況下の65（慶応元）年、弥兵衛は新たな商品を見つける。外国船への給水だ。ロシア軍艦が運上所に水を求めたが、従来の水業者は採算が合わず廃業した。横浜では庶民も山手の台地から運ぶ飲料水を買っていたが、船の水はさらに遠方から運んでいた。弥兵衛は破損船を1日で水船に改造し、水を集め大量を運んだ。ロシア軍御用達となった。

弥兵衛は港の仕事を人に任せ、1866（慶応2）年頃洋銀両替商になる。「当時のハマの大商人との交際がひらけた」。註1、補註2

ところが好時魔多し、同年12月横浜大火。豚小屋が出火元ゆえ「豚屋火事」と呼ぶ。弥兵衛の家も焼失、これを機に横浜を去る。弥兵衛は持ち前の知恵と行動力で時代の流れに乗ろうとするが、毎回大きな波や事故に呑まれてしまう。それでも新たにチャレンジする。

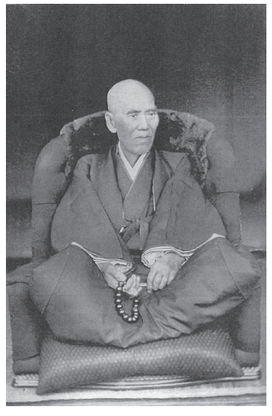
また時計を戻す。1861（文久元）年、幕府が西欧列強に江戸・大坂・新潟・兵庫開港延期を申し入れていた。67（慶応3）年、そろそろ開港地を決めなければならない。弥兵衛は兵庫か新潟と予想した。新しい土地で成功するには機先を制すること。横浜ではスタートが遅かった。67年3月弥兵衛は船で神戸村に着いた。海辺に土地を借り、得意の語学で外国商人から品物を仕入れ、西洋小間物販売「長門屋」を開業する。12月兵庫開港の勅許、68（慶応4）年1月鳥羽伏見の戦い、4月江戸無血開城、5月上野戦争。同月伊藤博文が兵庫県知事就任。横浜密航事件とのつながりがどう影響したか不明だが、弥兵衛は伊藤の知遇を得た。外国船に関する一切の運送取り扱い業を任された。9月明治改元。69（明治2）年に伊藤は政府に移るが、弥兵衛は「廻船商社の差配方申付候事」「蒸気通商丸取扱廻船社執事候事」の辞令を受ける。郵便、関西33藩の御用達、諸藩士の乗船・上陸許可について全権委任である。註3

70（明治3）年「長州ファイブ」井上馨が大阪造幣頭就任。造幣寮は汽船・運貨丸を所有し、大阪・神戸間で貨幣を運んでいた。月に1、2回航行するだけで、高給の外国人船長・船員を雇っていた。弥兵衛は井上に陳情、同船借り受けと輸送を申し出た。外国人を解雇し、日本人に入れ替えることで経費を減らした。現金に加え一般貨物も輸送し、ピストン運航することで利益を出した。1回の航海で貸与料をまかなえた。この頃、栄町通に「壮麗なる家屋」（註1）を建設している。

72（明治5）年運貨丸を払い下げられ、新たに汽船を購入し、全6隻で神戸から大阪、中国、四国、九州に定期航路を開く。大阪に支店を置き、月3回出航。積極的に新聞広告を出した。

戦争特需があった。74（明治7）年の「台湾征伐」には不参加だったが、77（明治10）年「西南戦争」では政府徴用船となり補助金と輸送料を得た。岩崎弥太郎は両戦役により政商としての地位を確立していた（補註3）。弥兵衛も復路で別子銅山の銅を運び利益を出した。また、栄町通の邸宅に山県有朋中将ら陸海軍幹部が宿泊し、事実上の最高司令部となった。

註1　長谷川伸「よこはま白話」（『長谷川伸全集第12巻』朝日新聞社　1972年）所収。長谷川は横浜生まれ、育ち。1953年元旦から「神奈川新聞」に99回連載。「白話」とは中国の口語・俗語のこと。「白」は「百」に一つ足りないという意味も兼ねる。長谷川は後身を多数育成、門下生に村上元三、山岡荘八、山手樹一郎、池波正太郎、平岩弓枝ら。
註2　『従六位光村彌兵衛傳』中西牛郎編・発行　1894年。長谷川伸、光村父子に関する本の「弥兵衛」エピソードは本書に拠る。立身出世物語として面白いが、神戸以前のことは確たる証拠がない。
註3　神戸新聞社著『海鳴りやまず　神戸近代史の主役たち　第一部』神戸新聞出版センター　1977年
補註1　上掲「註2」は池田一行を仏滞在中の民部卿病気見舞いとするが、不明。同年池田長発（ながおき）遣欧使節団が横浜鎖港を伝えるため渡仏。
補註2　『光村利藻伝』（増尾信之、光村原色版印刷所、1964年）は幕末金銀比価（日本の比価が1：5に対し、海外は1：15、洋銀を一分銀に交換すれば利益が出る）で利潤の仕組みを説明する。幕末の金流出の原因なのだが、下記資料は、1860年「万延の改鋳」によって海外の比価と同等になり金流出は改善、と説明。弥兵衛が大儲けしたとは断定できない。参考：「『円』と日銀」日本銀行金融研究所
https://www.imes.boj.or.jp/cm/collection/ten-jizuroku/mod/webP65_77ModernTimes01.pdf
補註3　1875年頃岩崎は政府の助成で海員養成学校設立（のち東京商船学校）。これに対抗して、弥兵衛と住友家大番頭・広瀬宰平が大阪に私立商船学校設立（のち大阪府立商船学校）。
写真　弥兵衛晩年の写真。上掲「註2」より。
引用文は適宜新字・新かなに直した。





# みなとMOTOMACHIケンチクさんぽ vol.11

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部 兵庫地域会　地域まちづくり委員会

## モトコーを歩く

神戸のまちは東西に細長くのびる商店街や町名が多くある。海から山までの間には何層もの東西レイヤーが重なり、レイヤーごとに色目が違う。そこに、山から海にかけての川や、川だった筋が東西レイヤーを南北に貫いている。南北の高低差と、東西には筋ごとに緩やかな蒲鉾状の地形が連続し、どこを切っても、どこを歩いても、表情や味わいがとても豊かだ。その中でも色濃い通りが通称「モトコー」元町高架通商店街である。東西のレイヤーの中で、ほろ苦くもっとも濃い、そんなイメージの場所だ。その場所が今大きく変わろうとしているということで、久しぶりにモトコーを歩いてみた。JR元町駅からJR神戸駅までの線路の下の約1kmの商店街。高架下の南側と北側に連続する商店が立ち並び、その間を東西に商店街がある。商店街はヒューマンスケールで人がすれ違うには肩が触れ合いそうな幅で、薄暗い。　所々、人の肩幅ほどの幅で南北に抜けている隙間があり、長い商店街の換気や光を取り入れている。JR元町駅から西に向かって進む。1番街の先頭は、淡水軒という中華料理屋さん。そこから入ると商店街は緩やかにカーブしながら下っている。レンガタイルと左右の商店は、10年前には、古着屋、レコード屋などがあったが、先日訪れたときには、たくさんの商店のシャッターがおり、シャッターには閉店の文字や移転先が書かれていた。2番街の始まりはレンセイ製菓。どこか郷愁を感じる店。私の事務所が元町3丁目にあった頃、2番街までは雨の日や夏の暑い日に通り抜けた。そして、3番街。今は白く背の高い仮囲いで覆われていた。その中でいくつかの商店が営業されていたが、何か白い空間の中のお店は、懐かしい佇まいの中に新鮮さも感じた。その横にあ った南北を抜ける公園のような場所は、ぽっかりと開いていてなんとなく清々しさがあった。そして次に黒い物体が新しく立てられていた。これは問題な塊だと感じた。ハリボテのレンガ調吹付けタイル、人を寄せ付けない硬さと嫌悪感を感じた。4番街からは、シャッターが前よりも増えていたが、私の知っているモトコーだった。そして、4番街からは看板に独自のネーミングが現る。4番街は花隈南商店街。また、前から気になっていたのは、4番街あたりから、通りの北側の建物と商店街の間に陳列棚のようなものが出てくること。商店街に対しては、その陳列棚が面していて、北側の商店は、北側の道路に対して開いた店構えになっていることだ。私がここを歩くときいつも、この陳列棚と南側の商店のシャッターが全部開いていて、肩をぶつけながら人が行き交う風景を想像する。どんな風に賑やかに人が行き交っていたんだろうか、お店の人がきっとこの隙間に体を寄せながら、お客と話をしていたんだろうか、と。そして、今、このシャッターの向こうには一体どんなものが収納されているんだろうか?と思いを馳せる。5番街のモトコーファイブは、ある時から商店街の天井が捲られ、高架橋のコンクリートの天井が見え隠れする。商店街の天井がなくなると一気に、別空間になる。日常から非日常に。隙間から見える2階がレトロだったりするとつい、そこで想像の物語が始まる。6番街のモトコータウン6もすっかりシャッターだらけだが音楽が流れ、そのスピーカーがみてきた風景を想像する。私はすっかり、モトコーが賑やかな時期を想像してきてしまったが、果たして、本当にそんな時代があったのかもわからない。東西に伸びる商店街の南側の商店が、どうして南の道路に対して開かないのか、についても前から気になっていたことだ。長い長い商店街は、小さな点の集まりで、そのそれぞれが魅力的で個性的だから面白い。シャッターとなった場所からも感じ取れる面影や気配がタイムスリップして、知らないはずの過去を想像させる。この神戸の肝のような場所が、リノベーションされ、神戸の新たな魅力を発信できる場所となるには、何かもっと仕掛けや巻き込みが必要なのではないかと思った。

モトコー１東出入口

所々南北に抜ける人の肩幅ほどの隙間

商店街（西向き）

モトコー６西出入口

## これからのモトコー

すでにJRの橋脚の耐震改修でたくさんのエリアが解体され、今まで利用者の手で小さく改修し続けられた足元の小屋たちの循環が終わりをむかえる。動物的というか、自然発生的というか、そんな営みがなくなることにさみしさを感じるのは、モトコー自体で感じるもの以外に、動物的人間感のようなものが消えていく感じがするからだ。人間の性能が衰えるというか、そんな感覚にも思える。そのうち手の指がなくなるんじゃないかとか、野生的な感覚が薄れ、違うものが発達していくのだろうと感じる。でも、それは悪いことではないのかもしれない。全ての生き物が、常に進化という、変化し続けているのだから、きっとそうなんだろう。お年寄りにできて若者にはできないことがあり、お年寄りには思いもつかなくて、若者にできる発想がいつの時代にもあるから、ここモトコーでも同じことが起きているのかもしれない。変化を肯定的に考えて、ここからまた100年のモトコーの姿をつくってほしい。もっと言うと、1時代で、売り手側だけの都合でできた箱では、もはやモトコーの魅力を発揮できない。ぜひ、町ぐるみで、たくさんの人を巻き込んだ開発を進めてほしい。

阿曽 芙実（あそ ふみ）
阿曽芙実建築設計事務所　代表
／一級建築士
／武庫川女子大学　非常勤講師
／摂南大学　非常勤講師